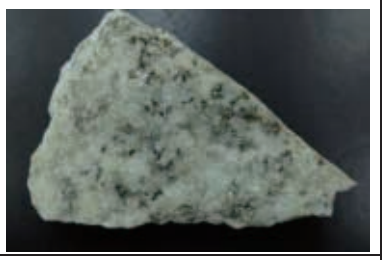
２．瀬戸内海の主な石の産地

名　　称	特　　徴
御影石（みかげいし） （兵庫県神戸市）	兵庫県六甲山南麓、神戸市東灘区御影地方で採石される花崗岩の石材を御影石と呼んだのが始まりで、それが花崗岩や花崗岩の石材の通称となった。特に御影地方のものは、本御影とよばれ区別されている。本御影は中粒の黒雲母花崗岩で、肉紅色のカリ長石を含むため肉紅色を呈し、御影石の中でもっとも美しいとされる。 （参考：日本大百科全書）
竜山石（たつやまいし） （兵庫県高砂市）	兵庫県高砂市竜山にある岩山で、相生層群の流紋岩質塊状凝灰岩によりできている。竜山石は適度な硬さと粘りがあり加工に向いていることから、古墳時代に石棺の石材として切り出されてから、約 1700 年にわたって採石されている。また、この竜山石の岩盤を掘りこんだ巨石遺構が「石の宝殿」である。「石の宝殿」は横口式石槨を作ろうとしたが未完成のまま放置されたものであろうという説が有力である。12 世紀の文献には、生石（おうしこ）神社の御神体として祀られているという記述があり、宮崎県天の逆鉾などとともに、日本三奇とされている。平成 26 年に国の史跡に指定された。 （参考：ひょうごの地形・地質・自然景観　神戸新聞総合出版センター発行）
和泉砂岩（いずみさがん） ・和泉石（いずみいし） （大阪府阪南市、泉南市） ・撫養石（むやいし） （徳島県鳴門市）	西南日本を縦断する中央構造線に並行して、和泉山脈から阿讃山脈の一帯で分布する白亜紀後期の和泉層群は、良質の砂岩が産出することで知られる。このうち、和泉山脈で産するものは「和泉石(いずみいし)」、阿讃山脈のものは「撫養石(むやいし)」と呼ばれる。 和泉石は、近世以降、和歌山城や岸和田城をはじめ、泉南地域の民家や田畑の石垣にも多く使用されたほか、「泉州石工」の手により狛犬・石灯籠などが作られ、瀬戸内海各地の神社に多く奉納された。また高い技術をもつ泉州出身の石工集団は、瀬戸内海の花崗岩産出地域にも多く進出し、各地で石材加工業の発展を担った。 和歌山城の石垣

名　　称	特　　徴
	撫養石は、主に徳島県鳴門市(撫養)で産出し、古くは古墳時代の石室に使用され、その後、吉野川下流域を中心に神社の石像物や民家などの石垣にも多く使用された。また近世以降は、鳴門の塩田地帯を縦横に巡る水路堤敷の石垣として多用された。 塩田水路の石垣
白川石（しらかわいし） （京都府京都市）	京都市の比叡山から大文字山付近に露頭する黒雲母花崗岩。平安時代から石塔等に利用され、安土桃山時代には伏見城や大坂城、方広寺等の石切場となっている。また、白川石が風化した白川砂は神社や庭園の白砂として広く用いられている。
庵治石（あじいし） （香川県高松市）	庵治石とは、細粒黒雲母花崗岩という石英、長石を主成分とし少量の黒雲母と角閃石を含む石のことで、八栗五剣山の西麓で採石されている。江戸時代には高松藩の御用丁場になったといわれており、主に墓石、灯籠、石彫などに利用されている。 （参考：高松市牟礼庵治商工会 HP）
サヌカイト （香川県）	サヌカイトは、瀬戸内海火山岩類に属し、天然ガラスを多く含み、非常に緻密な古銅輝石安山岩である。エッジ状に割れやすく、断片のエッジは鋭く切れ味が良いため、旧石器時代から弥生時代にかけて石器として利用された。尖頭器、ナイフ形石器、スクレーパなどの石器に利用されてきた。主に香川県（五色台、金山、城山など）で産出することから、ドイツの学者ワインシエンクにより「サヌカイト」と命名された。 サヌカイトは、固いもので叩くと高く澄んだ音がするので、カンカン石とも呼ばれ、楽器としても利用されている。
サヌカイト （二上山：大阪府・奈良県の県境）	二上山（にじょうざん）は金剛山地の北部に位置する山で、石器として使用されたサヌカイト（安山岩）の産地である。二上山麓には、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡が数多く発見されており、二上山北麓遺跡群と呼ばれている。
豊島石（てしまいし） (香川県土庄町)	豊島石は、角礫凝灰岩と言われる加工しやすい石であるため、鎌倉時代から採掘され、灯籠用原石として全国各地で用いられてきた。石灯籠としては、京都の桂離宮や二条城、大阪の住吉神社のものが有名である。水に弱く風化しやすい欠点があるが、熱に強く 1350 度から 1450 度くらい耐えられるため、現在では茶室の炉などに使われている。壇山（檀山）の頂上近くに、明治 42 年（1909 年）から採掘されていた大丁場があるが、現在は閉鎖されている。

名　　称	特　　徴
議院石（ぎいんせき） （広島県倉橋島、山口県黒髪島）	議院石は広島県呉市沖合にある倉橋島、山口県周南市沖合の黒髪島から産出される花崗岩であり、国会議事堂や議院会館に使用されたことから、この名前がある。主に、墓石や建築物に利用されている。 （参考：歴史ある石材の島の交流会、中国経済産業局作成のリーフレット）
北木石（きたぎいし） （岡山県笠岡市）	北木石は、岡山県笠岡市、笠岡諸島の北木島で産出される花崗岩である。明治時代以降、日本銀行本店本館、靖国神社鳥居、明治生命館、東京駅丸の内駅舎等多数の歴史的建造物に用いられている。現代では主に墓石、建築材として利用されている。
赤間硯（あかますずり） （山口県宇部市、下関市）	赤紫色を基調とする山口県特産の赤間硯は、国の伝統的工芸品に認定されており、その名称は、古くから赤間関（あかまがせき：現在の下関市の旧市街）で制作されてきたことによる。現在は、宇部市の山で採石されており、宇部市や下関市の職人の手で硯に加工され、赤間硯の歴史を現代に伝えている。赤間硯の原石は質が硬く緻密なため吸水率も低く、粘りがあるため細工がしやすく、硯石として優れた条件を持っている。また、むらなく*鋒鋩があり密立しているので、磨墨、発墨も良く、のびの良い墨汁を得ることができる。硯の形は数多くあり、自然のままにとどめたものから、種々の彫刻を施した優美なものまである。角硯や丸硯などは端正な美しさと重量感のある実用を兼ねた愛好品、野面硯は原石の形を活かした大胆な造形と自然美に趣があり、彫刻は簡素なものから精緻なものまで幅広く、伝統的な形式を守りながら伝承されてきた技巧をあますことなく表現し、時代の特徴や傾向を如実に示している。 歴史的には、17 世紀初頭、毛利輝元の遺品として「天下一」「赤間関住（じゅう）大森土佐守頼澂（とさのかみよりずみ）」と銘の刻まれた赤間硯が防府市の毛利博物館に所蔵されており、江戸時代に萩藩から朝鮮通信使への贈答品として度々使われた記録がある。オランダのライデン国立民俗学博物館には、「akama ishi」の名称で １９世紀初期にシーボルトコレクションとして収集された赤間硯が所蔵されている。 ＊「鋒鋩」（ほうぼう）：石英などの小さな結晶で、墨をする際におろし金のような役割をするもの。
大島石（おおしまいし） （愛媛県今治市）	大島石は、愛媛県今治市大島で、700 年前から採石されている花崗岩で、石目、岩肌が美しく風化しにくいという特徴がある。青御影石として、宝篋印塔、墓石、建築物（国会議事堂、赤坂離宮、奈良帝室博物館等）などに利用されている。（参照：今治市 HP）

名　　称	特　　徴
伊予・阿波青石 （あおいし） （愛媛県西条市、徳島県）	四国の名石として、深緑色で独特の縞模様をした青石（玄武岩が変成を受けてできた緑色片岩）があるが、瀬戸内海では、愛媛県、徳島県の三波川変成帯の地域から産出することから、伊予青石や阿波青石と呼ばれている。主に、庭石、沓脱石、彫刻の台座などに利用されている。
エジル石閃長岩（えじるせきせんちょうがん） （愛媛県岩城島）	エジル石閃長岩は、瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ愛媛県岩城島で産出する岩石で、杉石や片山石などの新鉱物を含む特異な石として愛媛県の天然記念物に指定されている。また、近年の研究で岩石中から、リチウムを多量に含む非常に珍しい新鉱物「村上石」が発見され注目を集めている。 
黒曜石（こくようせき） （大分県姫島）	火山活動に伴い流紋岩質マグマが高温高圧の状態から地上に噴出したり、地表近くに貫入し急冷した場合にできるといわれている。黒曜石は、黒色ないしは暗色の火山ガラスで、化学組成は流紋岩質、破断面は貝殻状になる。晶子や微晶を含み少量の班晶を含むことがある。 姫島は、縄文から弥生時代にかけて西南日本に広く分布した黒曜石産地として有名である。通常の黒曜石は黒色であるが、姫島の黒曜石は乳白色を帯びたものもある。姫島の黒曜石の産地は、国の天然記念物に指定されている。 （参照：姫島村 HP）

瀬戸内海における主な石の産地